

合、左手の使用が考えられるが、完形品でないため明確に判断できない。

資料No.7

穿孔が不完全であるため、製作途中の未完成品と思われる資料である。破損したため使用されなかったと想定され、使用痕も確認できなかった。右面に穿孔途中の浅い窪みが1か所残っている。石庖丁の製作過程における整形、調整、粗研磨等を経た後、穿孔段階で破損したと考えられる。穿孔は片面(左図)に2か所の凹みをつくった後、反対面(右図)の一方に浅い凹みをつくり、もう1か所の孔を穿つ段階で破損した可能性が想定される。また、わずかに残った刃部から推定すると左図が主要面と思われ、主要面の方から先に凹みを作っていることが分かる。同様の例として指宿市橋牟礼川遺跡出土の石庖丁も主要面の方から穿孔を施している(東 2000)。いずれにせよ製作過程を考える上での貴重な資料と言える。

資料No.8

左右両面とも使用痕は観察されなかった。穿孔の跡と刃部が形成されているため、石庖丁と想定されるが、使用前に破損したか別な用途で使用された可能性もある(実測図未掲載)。

5 考察

使用痕によってできる光沢は阿子島(1989)によって第3表のようにまとめられており、イネ科草本植物の光沢はB→Aのように遷移すると考えられてきた。ところが弥生期の農耕具とされる石器の中に肉眼でも観察できる程度に発達した強い光沢が確認できるものがある。俗に「ロー状光沢」と呼ばれているが、これはAタイプポリッシュが発達したもので、いわゆる「コーングロス」であることが示されている(御堂島 1989)。このロー状光沢(Aタイプポリッシュ)は磨製石庖丁には観察されない。

町田勝則は、「磨製石庖丁の『摘む』という操作とBタイプポリッシュ、大型(磨製)石庖丁の『刈り取る』という操作とロー状光沢(Aタイプポリッシュ)が結びつく」と示している(町田 2002)。これらの研究や実験使用痕観察の結果を前提とすると、今回行った分析でもBタイプのコーングロスパッチが観察されたため、機能として「摘む」という動作が想定できる。また、Aタイプ及びBタイプの光沢とイネ科植物との相関関係を前提とすると、今回分析した石庖丁の被加工物はイネ科植物であった可能性が考えられる。

しかし、光沢斑形成のメカニズムには未だ定説がなく、光沢形成の際に石器表面と接触する対象物にも幾つかの説があるため¹⁾、被加工物の推定には慎重にならざるを得ない。しかし光沢斑が形成されるのは何らかの物質が接触した結果であり、その分布図や刃部形態等から握り方の推定

ができる。また、非主要面に現れる光沢斑の解釈は、イネ科植物を巻くように握り接触したとか、単に親指以外の指が接触したために形成されたなどの可能性が考えられる。いずれにせよ現段階では細かな光沢分布と機能を結びつけることが困難な部分が残されており、実験使用痕分析をふまえた上でさまざまな要因や機能を考えなければならない。

6 課題

今回の分析により、これまで行われてきた磨製石庖丁の使用痕分析の結果を追認する光沢分布図が南九州の石庖丁においても同様に得られるということが分かった。

1990年代後半以降、使用痕分析の例は着実に増えてきているが、研究当初より東日本に研究者や対象地域が偏っており、九州など西日本での研究例が少ない状態が続いてきた。今回は全体的な傾向を探るには資料数が少なかったが、石器の機能を推定する上での一資料を追加できたと思う。

実験使用痕分析を行っていないことや分析資料が少なかったために、機能論など十分な結論を得られなかったが、今後は在地の石材を使用した実験使用痕分析や観察データの定量化・客観化を図ることが重要となる。

また、他の石製農具を含めた分析資料数を増やすことで南九州における初期農耕の様相にも迫っていききたい。また、ポリッシュ形成のメカニズムについては定説がない。このメカニズムを解明することが被加工物の推定にもつながり、今後の使用痕研究に大きく貢献することは間違いない。

【 註 】

光沢斑形成のメカニズムは、大きくシリカゲル沈積説と摩耗説の2説があり、シリカゲル説は、石器表面への付着(+)、摩耗説は石器表面の摩耗(-)と相反する考えである。現在は、摩耗説の方が有力であるという意見が多い。又、被加工物についても実験使用痕分析により、イネ科植物が推定されてきたが、土や埃(ほこり)、又は単に手との接触(手ずれ)によって形成されるという見解もある。

【引用・参考文献】

- 阿子島香 1989 『石器の使用痕』ニューサイエンス社
梶原 洋・阿子島香 1981 「頁岩石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み」—(東北大学使用痕研究チームによる研究報告 その2)『考古雑誌』67—1: 1—36 日本考古学会
川口雅之 2002 「南九州における稲作文化と木製品」『月刊文化財』11月号
斎野裕彦 2002 「農具—石庖丁・大型直縁刃石器・石鎌」『考古資料大観』第9巻 小学館
沢田 敦 1995 「下谷地遺跡出土「石庖丁」の使用痕分析—収穫具からみた弥生時代の越後における稲作農耕の形態—」『新潟考古』6
堂込秀人 2000 「南九州における弥生文化成立期の具体像」『第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立—各地における弥生文化成立期の具体像発表要旨集』
東 和幸 2000 「石庖丁の主要面と穿孔の組み合わせ」『大河』7号 大河同人
本田道輝 1992 「鹿児島県下の弥生時代の石器と金属器出土遺跡地名表」『南九州における原始・古代文化の